

# 椎谷観音御開帳



## Profile

今より千二百余年の昔、嵯峨天皇の弘仁2年(811)のこと、椎谷の海に毎夜不思議な光が現れました。村人達は何の光かと思ひ、網を下ろしますと正観世音菩薩の御像が上がりました。村人達は山の上に立派な御堂を建て、御像を安置しました。それから800年余の寛永元年(1624)山伏がこのお堂に泊まり、暖を取るため仏像などを燃やし、本尊様をも燃やそうとしましたところ、お堂は焼け落ちてしまいました。

この時、佐渡の国羽茂郡宿根木村の丸山治久という人が遙か海を隔てた椎谷の観音様のご利益を信仰し、男の子を授け賜えと一心にお願ひし、観音様のお告げを蒙って男の子を授かりました。寛永7年忠三郎さんが7歳の正月17日、別段苦しむ様子もなく眠るように息絶えてしまいました。

椎谷観音堂の住職の夢に観音様が現れ「我は佐渡の丸山治久が切なる願ひに答えて、彼が一子忠三郎となって生まれたが、今又帰る時節が来たので当山に帰るであろう」と言うお告げがありました。本尊様がお帰りになられ、この御本尊様を秘仏として、住職一代に一回の御開帳としています。